発達理論の学び舎

Back Number: Vol 69

Website:「発達理論の学び舎」

小松美羽「こみ上げる魂の振動に命を感じたか」

© YOHEI KATO 2018

目次

1361. 運

1362. あの日、日本に戻る飛行機の中で

1363. 逆時系列的な夢の振り返り:存在のデジタル球体

1364. 発達に必要な「良質な葛藤」と知性発達科学の先端研究

1365. 森有正全集と「差異」について

1366. 寂しい風

1367. 新たな風

1368. 絶えざる更新と行進

1369. 集合意識を持つ学習場

1370. 流れぬ時の流れの中で

1371. 真眼と死と魂

1372. 名付けの責任

1373. 余白

1374. 睡眠と治癒

1375. 何気ない月曜日の午後

1376. 寺田寅彦・川端康成・小林秀雄

1377. 魂と言葉:神道と国学

1378. 日本を発ったあの日から

1379. 昨年の自分からの手紙

1380. 親としての著者、子としての書籍

© YOHEI KATO 2018

1361. 運

巨大な入道雲の間に飛行機雲が走っている。夕方のフローニンゲンの空は明るく、多様な雲が静かに躍動している。ゆっくりと過ぎゆく入道雲を眺めながら、ぼんやりと今日一日を振り返っていた。

早朝に小雨が降り、昼食前に雨が止んだ。天気予報によると、昼食前から一気に晴れ間が広がり、それ以降はずっと晴れとのことであった。四日分の食料を購入するために、私は近所のスーパーに向かった。自宅を出発し、空を仰ぎ見ると、そこには青空が広がっていた。買い物を済ませ、自宅に戻る最中に、河川の水の溜まり場にカメの親子を見つけた。この親子はいつもそこにいる。

以前の日記に書き留めていたように、もともとそこはカモメの親子が暮らしていた場所である。いつの間にやらそこはカモメの親子ではなく、カメの親子の生活拠点になっているようだ。

この河川敷を通る時、いつもこのカメの親子の様子をちょっとだけ確認する。なぜかいつもこちら側ではなく、河川に面した家の方に顔を向けている。今日もその様子を確認すると、いったいこのカメの親子は何を見ているのだろうか、と気になり始めた。もちろん、その問いに対する明確な答えなどカメに聞いてみなければわからないのだが、外側の観察者として仮説を立てることは可能だ。

想像力を膨らませながら、いくつかの仮説を立てることは実に面白い。仮説を立てるときの注意点は、外側の観察者としての視点に基づく方法とカメの視点に基づく方法の両方が存在するということだ。片方の視点だけではなく、双方の視点を持って想像性に溢れる仮説を立てることに意識を奪われながらも、なんとか家に辿り着いた。帰宅後、手を洗い、購入したものを冷蔵庫に詰めていると、突然激しい雨が降り始めた。

たった数分間の掛け違い。天気予報を裏切る形で激しい雨が降り始めたのだが、その雨も数分しておさまり、淡い太陽光をもたらす空が出現した。激しい雨が降り、それがすぐさま止んだ様子について改めて思いを巡らせていると、自分はつくづく運がいいと思った。

頭の中にいる誰かが私に対して、「あなたは人よりも何か優れていることがありますか？」という問いを投げかけた。その問いに対して私は、「人一倍運がいいことです」と答えていた。「いつも運がいい」ということは、確かに自分の特徴を表していると思う。運というのは私の理解を超える現象だが、

運をもたらしてくれる大きな存在が自分の背後に常にいるような感覚がある。それはいつも私を見守りながら、運を私にもたらしてくれる存在だ。

夕方のフローニンゲンの空をまた眺める。なんともなしにただ眺める。視界に入る入道雲の一つ一つの中に、道路の脇に植えられた木々の葉一枚一枚の中に、運というものが宿っている気がしてならなかった。そこには運があり、縁があった。そしてそこには、縁があり、運があった。2017/7/28（金）

No.6: Ground of Our Reality

A strong wind continues to run in the external world. It looks like a person who engages in interval training. Everything I see, hear, and feel is myself. The subject and object disappear and return back to “it.” It spawns various phenomena in this reality. However, I should remember that the diversity is not the ground of the reality per se but the multifaceted aspects of our reality. The incessant emerging phenomena are a part of the reality, but they are not the ground of our reality. Thursday, 8/3/2017

1362. あの日、日本に戻る飛行機の中で

昼食後、オンラインゼミナールの自主勉強会に顔を出し、その後のオフィスアワーの中で、受講者の方々とやり取りをさせていただいた。実際のクラスではなかなか一人一人の方の声を聞くことができないので、こうした場は私にとっても非常に有り難い。

自主勉強会は盛況だったらしく、オフィスアワーの時間にもその充実ぶりが伝わってくるかのようだった。その時間にどのようなやり取りがなされたのかはここに書くことができない。しかし、実際のクラス以上に重要なやり取りがなされていたという実感がある。私の中では、自主勉強会とオフィスアワーがメインであり、実際のクラスは補助的なものなのだと改めて思った。

オフィスアワーが終わると、明日明後日の実際のクラスに向けた最終準備に取り掛かった。すると突然、明日明後日のクラスは、ロシアの作曲家アレクサンダー・ボロディンの曲を開始前の待ち時間に流そうという思いが湧いてきた。湧き上がる思いに忠実になり、手元の楽曲リストからボロディンの

交響詩『中央アジアの草原にて』を久しぶりに聴いてみることにした。この曲が始まるやいなや、私の意識は過去の記憶の中に溶け込んでいった。

それは今から二年前のことだった。あの日、私はロサンゼルスから日本に向かう飛行機の中にいた。米国での四年間の生活を終え、一年ほど日本に滞在することを決めた私は、あの日飛行機の中にいた。そして、そこでボロディンの曲に出会った。機内サービスの音楽を何気なく聴いていると、これまで聴いたことのないような特徴を持った曲に私の意識が向かった。

それは、ボロディンが残した『だったん人の踊り』という曲だった。あの時の自分がどのような胸中にあったのかを私は知っている。『だったん人の踊り』という曲は、あの時の自分を励ますような力を放っていた。曲を最後まで静かに聴き、曲が終わると、この曲の解説が日本語で始まった。

そこで私は、ボロディンという作曲家の生き方に大きな感銘を受けた。ボロディンは30歳までは化学者だった。しかも数多くの優れた研究をなし、学術の世界で地位を築いていた。ボロディンは30歳を迎えた時、ロシアの作曲家ミリイ・バラキレフに出会って初めて作曲を学び始めた。それまで音楽教育を受けていない者が、しかも化学者としての仕事を継続させながら、このような曲を生み出せるということに、私はただただ驚いていた。

ボロディンの生き様、そして彼が実際に残した楽曲は、学術の世界に身を置くことが遅かった当時の私を大きく励ました。人はいくつになっても新たな道を歩んで行けるのだということ。ボロディンの生き様と彼が残した楽曲から汲み取った意味はそれだった。

日没が近づいたフローニンゲンの空が黄金色に輝いている。先ほどまで見えていた入道雲や飛行機雲は、もはやそこにはなかった。あの飛行機雲と二年前のあの日の機内の中の自分が、夕日に染まるフローニンゲンの空に溶け込んでいくかのようだった。書斎の中に、『中央アジアの草原にて』が響き渡る。

この曲が描くもの。それは中央アジアの草原で交流するロシア人と東洋人の姿だ。そこに私は、この世界という草原の中で、全身全霊で人類に関与しようとする一人の日本人の姿を見てとった。
2017/7/28（金）

© YOHEI KATO 2018

No.7: Hidden Dimensions of The Reality

Gloomy clouds are covering the sky in the morning. However, I should not look at the surface dimension of what I can see right now. A hidden dimension is always waiting for me, and I am awaiting it, too. Here, I can find a deep-blue sky behind the dark clouds. I can also witness a shining universe behind the sky. Once you can detect the undisclosed dimensions of the external reality, you can discover the veiled dimensions of the internal reality. Friday, 8/4/2017

1363. 逆時系列的な夢の振り返り：存在のデジタル球体

活力がみなぎり、幸福感に包まれた朝だった。早朝に目覚めた瞬間、その場から一日の仕事を全力で始めることができるような気力に満ち溢れていた。そして、その気力が私に幸福感をもたらした。昨夜見た夢はとても印象的なのだが、記憶が不鮮明になりつつある。

時間の流れとは逆向きに夢の内容を振り返ってみたい。目が醒める直前、私はオランダで新しい居住先を探しているようだった。一軒ほど家の下見に出かけ、その家にはまだ一人の若いオランダ人女性が住んでおり、家の中は雑然としていた。その女性はとても大柄で、185cmぐらいの身長だった。

オランダではそれほど珍しくはない女性の身長だが、それでも大きいことに変わりはない。親切にも家の中のあちこちを案内してくれたが、お世辞にも綺麗な家だとは言えず、それが私の印象を悪くさせた。家を出た時には、そこに住むことはないだろうという決心があった。よくよく考えてみると、今の家に全く不満もないことがわかり、むしろとても快適なことを思うと、このまま今の家に住み続けようと思うに至った。

下見先の家から自宅に向かう道中、自分の視点の高度が上がり、街にいる自分の存在を含め、自分の知り合いの存在が全てデジタルデータに変化した。電子化された地図の上に、自分も含めた知り合いの存在が球体のデジタルデータになり、点滅している。その人が今世界のどこにいるのかが一目瞭然であり、どの通りを歩いているのかも全てわかる。これは知り合いのみならず、自分の場合でもそうであり、確かに今自分がいる場所が地図上に点滅されていることを見て取れた。

街を歩いている自分の方向もわかり、顔の向きまでわかるような仕組みになっていた。球体のデジタルデータの額の部分に小さなオレンジ色の点があり、その点が眼を表しているようだった。つまり、このオレンジ色の点がその人の視線の方向を表しているということだ。自分を表す球体の動きを観察していると、オランダの街中を随分とキョロキョロしながら動いていることがわかった。

小さな路地に入り込み、それが間違った道だとわかって引き返す様子などがつぶさに見て取れ、少しばかり滑稽だった。自分の存在を示す球体から最も近くにある球体は、私から130kmほど東に離れた場所にあり、おそらくそれは私の友人であり、その人物はドイツ西部にいる。それが誰なのかよくわからない。その友人との距離が縮まることもあれば、離れることもあった。

この電子化された地図を眺めていて最後に気づいたのは、自分が随分と長い時間を家の中で過ごしているということだった。確かに、自分の仕事場は自宅であり、しかもそれは書斎の一箇所であるため、自分がその場所で多くの時間を過ごしていることには納得がいった。

自分を表す球体が書斎のある部屋の一箇所に留まっており、じっとしている様子が見て取れた。だが、よくよく観察してみると、自分を表す球体は小刻みに揺れていた。それは何気なく眺めてしまうと静止点なのだが、つぶさに観察すれば動点なのだ。自己という存在の不動性と多動性を実感したところで、夢から覚めた。

この夢の一つ前の夢はどのようなものだっただろうか。それは視覚映像が一切介入しない言葉だけの世界だった。その言葉の世界の中で、私は自らの言葉と向き合い、新たな言葉を生み出すことに従事していた。すると、これまでにはなかった新しい言葉が生まれ、それはそのまま人間の発達に関する大きな閃きにつながった。

新たな言葉は私たちの認識を変え、全く新しいものを私たちに開示する。それを身をもって体験することになった。あいにくその言葉がどのようなものだったのかを思い出すことができない。それが極めて斬新かつ重要な意味を持っていることだけは確かだった。

忘却の彼方に去ったその言葉を思い出そうとしていると、この夢の前にあともう一つ二つほどの夢があったことを思い出した。それは忘れ去られた言葉以上に深い世界の中に消え去っていた。夢を時系列的に振り返るのではなく、時間の矢を逆にしながら振り返るというのは、頭の中と内側のある

© YOHEI KATO 2018

感覚をくすぐるような感じがした。これは私にとって、また新たな興味深い体験だった。2017/7/29（土）

No.8: Anamnesis and Authentic Self

The music being played at this moment reminds me of something important. The aroma and taste of the coffee, which I am drinking right now, encourage me to recall something important.

It hints the exact moment that I have to remember something. Plato left a profound epistemological legacy for us, that is anamnesis. I have to recollect who I am, but I do not have to hasten to do that because the authentic self does not go anywhere but always stays here at this moment. Friday, 8/4/2017

1364. 発達に必要な「良質な葛藤」と知性発達科学の先端研究

今日は午前中に出版記念ゼミナールの第二回目のクラスがあった。回線の問題以上に、Adobe ConnectとPreziの相性が悪いのか、それともAdobe Connectで画面共有をすると負荷がかかりすぎるのか、それらの問題でこちらの音声が途切れ途切れになってしまったようだ。早急に手を打ち、結局これまでのゼミナールと同じようにマイクロソフトのPPTを活用し、画面共有をしないことにした。クラス終了後、Preziで作成した資料を全てPPTに移し替えていくという作業を行っていた。

この作業に随分と時間を取られてしまったため、夕方になるまで今日のクラスの振り返りをすることができなかった。今日のクラスを通じて得られた新たな気づきについて簡単に書き留めておきたい。本日は、拙書『成人発達理論による能力の成長』の第二章を取り上げた。具体的には、「点・線・面・立体」の成長サイクルやフラクタル構造の話、五つの成長法則に関する話、そして本書の中では詳しく言及することのできなかった、知性発達科学の先端的な研究成果を二つほど紹介した。

特に印象に残っているのは、私の論文アドバイザーであるサスキア・クネン教授の研究成果に関するものだ。クネン教授の研究の注目すべき研究の一つは、ロバート・キーガンの仮説的主張「発達には適切な課題と適切な支援が必要になる」というものを取り上げ、最適な葛藤量と葛藤と向き合う

時期、そして支援の量などの変数を考慮に入れてコンピューター・シミレーションを行ったものである。

葛藤量と葛藤と向き合う時期による分類に基づき、合計で六つほどのシミレーション結果をクラスの中で紹介した。シミレーション結果が示唆していることを端的に述べると、葛藤の量のみならず、人生のどの時期に葛藤と向き合うのかということが重要になる。さらには、葛藤の量に加えて、どのような質の葛藤と向き合うのかということも合わせて大切になる。ある受講者の方が「良質な葛藤」と向き合うことの大切さについて指摘をしてくださった。

まさにその通りであり、発達を促さない葛藤もあれば、発達を促す性質を持つ葛藤というのが存在している。発達を促す葛藤の最たるものは、今の自分の発達段階よりも下過ぎず上過ぎずという課題である。私たちは、発達の上限値と下限値から構成される発達範囲を有しているため、発達範囲の中にない課題は発達を促さない可能性が高い。クネン教授の研究では、どのような種類のどのような性質の葛藤が発達を促すのか、というところまで踏み込んでいないので、その点について研究を進めていくことは意義があるだろう。

その次に、私のメンターを務めてくださっているルート・ハータイ教授の研究についても触れた。彼の研究は、ダイナミックシステム理論とネットワーク理論が合わさった「ダイナミックネットワークアプローチ」という手法を用いて、能力の多様な要素間の関係を明らかにし、能力の動的な成長プロセスを明らかにするものである。

ハータイ教授のシミレーション結果も大変興味深く、着目する一つの能力に影響を与える多様な要素の関係性によって、その能力がどのように伸びるのかのプロセスが左右されてしまうことを明らかにした。さらには、多様な要素の中でも、とりわけ影響力の大きいものが存在していることを明らかにし、それはシステム科学の言葉で言えば「コントロールパラメーター」と呼ばれる。

コントロールパラメーターは、ある種、システムの挙動を決定づけるかじ取り役を担っており、その値いかんによってシステムの成長プロセスは大きく異なってくる。ダイナミックネットワークアプローチを活用した発達研究というのはまだまだこれからであり、ハータイ教授の研究はその先駆けのようなものである。実際にこの研究は、クネン教授の研究とは少し異なり、実証データをもとに数式モデルを

検証したわけではなく、仮説的にパラメーター設定を行いながらシミレーションを実行しているため、要素の定量化の問題などがまだ完全に解決しているわけではない。

いずれにせよ、近年の発達研究では、発達現象を動的なシステムかつネットワークとして捉える発想が芽生えており、二人の研究は今後も注目に値するだろう。そして、私もそうした観点で発達研究を進めていこうと思っている。2017/7/29(土)

No.9: A Lesson from a Gentle Breeze

A glorious tomorrow becomes today while a sublime today remains today forever. Time neither passes nor flows. In reality, it does not exist. Instead, we have only this present moment. The past and future unite with the present.

We have only the present, and we are the present per se. A gentle breeze is passing by the world in front of me, but it is not so in a profound sense because it is always a manifestation and embodiment of the present moment. Friday, 8/4/2017

1365. 森有正全集と「差異」について

夕食前、ようやく一息つくことができた。今日は起床直後にみなぎる活力を感じていたのだが、そうした活力があったとしても、その日が充実したものになるかどうかはそれほど関係ないことを思い知らされたような一日だった。

午前中のゼミナールの件をまだ引きずっており、音声の不具合で受講者の方々に迷惑をかけてしまったことがまだ気にかかっている。それに付随して、クラス終了後、資料を全てPPTに作り替えなければならなかったことが、随分とエネルギーを消費させることにつながってしまった。慌ただしく作業に従事していると、書斎の窓の景色を眺める心の余裕がなかったことに気づかされる。いつも私は、絶えず外の景色を眺めながら仕事を進めることで内側のリズムを生み出している。

専門書や論文を読むときでもそうであるし、何か文章を書くときでも、常に外側の景色を眺めることが不可欠になっている。外の景色を眺めること、とりわけ広大な空を眺めることは、自分の発想を広

げ、心を落ち着かせる作用があるようなのだ。目の前に広がる空のように、絶えず広い心を持って仕事に臨みたいと強く思う。

今日はもう入浴の時間が迫っており、これまでのところ専門書や論文を一ページも読んでいない。夕食後は、久しぶりに森有正先生の全集第一巻をゆっくりと読みたいと思う。本書の中に掲載されている二つの思索的エッセイ『バビロンの流れのほとりにて』と『流れのほとりにて』には、忘れられない思い出がある。昨年、日本から欧州に向かう際の機内で食い入るように読んでいた記憶がまざまざと蘇ってくる。

本書を読む私の目頭は、何度も熱くなっていたように記憶している。探究者としての自らのあり方と生き方を猛省させられるような記述、同時にそのような自分を励ますかのような記述、反省の念と奮起の念が同時に生起するかのような感覚の中で、私はこの本を食い入るように読んでいた。

本当に偶然だ。昨年この本を読んだのは、まさにちょうど今頃の時期であり、数日のズレしかない。

日本を離れてから一年の月日が経った。気付かない間に欧米で生活をする六年目の生活に入った。あの時からの一年をここでもう一度振り返りたい。自分がどれだけ歩みを進めることができたのか、辿り着くべき場所への距離があとどれくらいあるのかを含め、今日ここでもう一度本書を紐解きたいと思う。

昨日は、“Complexity Theory and the Politics of Education (2010)”という書籍を読み終えた。本書は、複雑性科学の観点から、教育実践や教育政策に関して思想的な検証を行う内容になっている。様々な研究者の論文を集め、教育を複雑性科学の観点から探究するという共通性がありながらも、研究者ごとに異なる独自の視点や思想が各論文に盛り込まれており、なかなか関心をそそるものだった。特に、フランスの哲学者ジャック・デリダやミシェル・フーコーの教育思想に触れている論文が随分と多く、彼らの教育思想については少し前から関心を寄せていたので、とても参考になる箇所が多々あった。

教育実践や教育政策に関して何か論文を執筆する際には、必ずや再び読み返すことになる書籍である。本書の中で、米国の文化人類学者グレゴリー・ベイトソンの「差異を見つけようとすることによって初めて差異が生まれる」という言葉が引用されていた。私は静かにその言葉の持つ深い意味

を聞き取ろうとしていた。これまで何度も書き留めてきたように、私たちは日々の生活を送る中で、自分の内側では絶えず差異が生み出されているのだ。しかし、私たちの多くはそれに気付くことがない。いや、それに気付こうとする意識がないのだ。そのような状態では、私たちの内面世界が深まっていくことはないだろう。

今この瞬間も絶えず生じている差異に気付きの意識を与えることによって、初めてそれが差異として顕現し、「差異が成熟をもたらす新たな差異を生む」という循環が生まれる。日々日記を書き留めることの一つの重要な役割は、差異を見つけようとする意識を喚起し、それが自らの成熟につながる差異を生み出すことにあるのだと思う。

夕食後、森先生の著作を読むことによって、また自らの内側に生じる差異を認識し、それを言葉の形に残しておきたいと思う。2017/7/29(土)

No.10: The Flux of Nouns from My Unconsciousness

Robustness, personification, epitome, juxtaposition, presupposition, fortune, rhapsody, malediction, reconciliation, harmony, sunrise, dream, annunciation, etc. The list endlessly goes on. Every word on the list corresponds with a particular image and sense, which is very intriguing to me. I have to paraphrase that every word invokes a specific image and sense rather than it correlates with them. Thus, a word has a shamanic invocation of particular image and sense.
Friday, 8/4/2017

1366. 寂しい風

両肘を窓の近辺に置きながら、窓ガラスに顔を近づけるように外の景色を眺めていた。名付けることの難しさ。両肘を置いたその場所は、一体なんと名付けたらいいのだろうかとしばし考えていた。結局、正式な名前が思い浮かぶことなく、自分の感覚が正しいと思う名付けをして進むしかなかった。それは固定的な名ではなく、可変的な名である。その名前は必ず変わる。

それでは、どのような場合に変わるのだろうか。それは私の内側が成熟した時に変わるのだ。この世界には名付けの範疇を超えたもので溢れ返っている。先ほど両肘をかけた場所もそうだ。そして、両肘をかけた瞬間の私の内側の感覚や感情もまた今の自分の名付けの力を超えている。

やはり全然話にならないのだ。欧州での一年間の生活を通じて、自分の中で何かが積み重なっている確かな実感があるが、それは些細なものでしかない。もっと重要なことがある。それに気づかなければならない。何かを積み重ねていくこと以上に、より根本的なものを自分は見落としているような気がしてなならない。それが見つからないというのが、今の自分が直面している内面上の課題なのだ。これを解決するにはどうしたらいいのだろうか？それは単純明快だ。

歩きながら待つこと、待ちながら歩くこと。それらを通じて自分の内面が緩やかに、そしてある瞬間に突発的に成熟を遂げることでしか、今抱えている課題は解決されないのだ。

夕食後の曇り空が妙に神妙に映る。薄暗くなりつつある辺りを通り抜けていく小さな風が、どこかとても悲しい。そのように世界が知覚されるのも、自分の内側の今の状態によるところが大きいだろう。どうにもこうにも、外側の世界と内側の世界の妙な連帯感を感じざるをえない。言い換えると、自分にはなんともすることのできない形で、内外の世界が動いており、同時に内外の世界が連結しているのだという感覚がある。

ここから先の自分の姿について思いを馳せる。それがどれほど無駄なことであるかを知りながらも、それが未来に希望を持つということなのだという思いでそれを行う。

「あぁ、見えない」という言葉が自然と漏れた。自らの発達後の姿など誰も見ることができないのだ。確かに、発達を扱う理論を用いて外形のそれが何たるかを知ることはできる。しかし、それがどれほど浅薄な営みであり、内実のないものであり、虚偽に彩られたものであるのかを知るのは発達後の当人だ。発達後の姿というのは、つくづく不可知性に包まれたものなのだということを再認識させられる。

またしても、魂を売る計画について考えがよぎる。この計画を振り払うことがまだできない。それは亡霊のように私の後を追いかけてくる。母国語を捨て、母国語以外の言語に魂を売る計画だ。できることならいっその事、自らの魂を差し出したいという気持ち。それを実行した瞬間、どれほど気が楽

© YOHEI KATO 2018

になるだろうか。だが、ギリギリのところで立ち続けなければならないのだと思う。母国語を涵養することが、どれほど母国語以外の言語を涵養することにつながるかは計り知れないものがある。そうした意味で、母国語を、そして自らの言葉を彫琢し続けなければならない。だがそれが辛いのだ。母国語を通じて母国に関与する自信が無いのだ。

この現実を逃避し、他国の言語を使って生きるという別の現実を作りたいと思うような気持ち。それは現実逃避であることを知りながらも、それがどれほど自分の肩にのしかかるものを楽にしてくれるだろうか。なんとか、断崖絶壁の手前に立ちながら、次の風が吹くことを待ってみたいと思う。それ以外に方法は無いのだから。

夕日の見えない曇りがかった空の中を、一羽の灰色の鳥が不規則に飛び去っていくのが見えた。どことなく辺りに寂しい風が吹く。2017/7/29（土）

No.11: Profound Nature

How profound nature is. Today, nature in front of me──clouds and the sky──revealed a new truth for me, which might be trivial for most people.

I realized that nature always encapsulates multiple layers of truths, but we are often enslaved by their lower layers. If we carefully pay attention to other layers that we have not focused on before, we will discover a new truth. This was what I experienced just now. Unknown and masked truths are always here and there, so why don't we open our eyes to see them? Friday, 8/4/2017

1367. 新たな風

六時に起床。寝室の窓から外を眺めると、遠方の空に真っ赤に燃える朝日が顔を出していた。しばらくその朝日を拝み、私は書斎に向かった。

昨日に引き続き、今日も活力が湧いている。昨日よりも静かな流れなのだが、それは確かに「活力」と表現していいものに違いはない。芯から湧き上がるような静かなうねり。今日の活力はそのような印象を放っている。

一昨夜に引き続き、昨夜も夢の中で重要な気づきを得た。今朝未明、その重大な気づきによって目を覚まし、いつものことながらそれを書き留めておこうとする強い衝動が自分を襲った。得られた気づきが極めて重要なものであったがゆえに、まとまった文章を書き留めておくことができそうであった。しかしまたしても、その場で文章を書き留めることをしなかったがために、その重大な気づきは再び無意識の世界に折りたたまれていった。

顕在意識の世界の中で、再びそれを開いていく試みに従事しなければならない。そんなことを今思う。その気づきは、無意識の世界の中に消え去っていったわけではなく、その世界のどこかに影を潜めているのだ。認識の光が当てられることを待っていると言ってもいいだろう。それを行うのは、顕在意識下における私だ。そのような役割を与えられているがゆえに、それを全うする責務がある。

起床直後に簡単に身体を目覚めさせる習慣的実践を行い、書斎の机に着くや否や、グレン・グールドの演奏するバッハをかける。ゴルトベルク変奏曲アリアが静かに流れ始める。この曲には何かがあるに違いない。毎回この曲を聴くたびに、そのようなことを思わされる。

自分を惹きつけてやまない何かがあることは確かであり、その奥にまた何か重要なものが秘められているような気がしてならない。そうでなければ、これほどまでにこの曲を繰り返し聴くはずはないだろう。

心が落ち着くというよりも、魂が落ち着くという感覚。この曲は魂を安らかにしてくれる感覚をもたらすが、それは鎮魂歌という意味ではなく、自らの魂にもう一度自己を立ち返らせるような内省的な感覚である。深く深く自己に立ち返ることを余儀なくさせるような音の泉がそこにある。バッハの最後の曲が終わったら、グールドが演奏するモーツァルトのピアノソナタを聴こうと思う。

グールドはあれほどまでにモーツァルトを嫌悪していたのに、ピアノソナタ全曲を録音していることが面白い。四時間ほどのピアノソナタ全集を聴いたら、再度繰り返しそれを聴くか、再びバッハに戻ることになるだろう。そのような予感がする。昨夜に書き留めていた最後の日記を思い返していた。一見すると、それは随分と否定的な内容に思えるかもしれない。

© YOHEI KATO 2018

仮にそうであったとしても、いや、そうだからこそ、それは非常に重要な意味を持っている。ギリギリのところに忍耐強く立ち、規律と克己を持ちながら生きようとする意志。昨夜待っていた新たな風が自分の中に吹き込んでくるのを感じる。

書斎の窓から外を眺めると、道路が濡れている。どうやら昨夜は雨が降っていたようだ。幸いにも今は雨が止んでいる。新しい風が早朝のフローニンゲンの街を静かに流れている。そしてそれは、自分の内側にも確かに流れている。2017/7/30(日)

No.12: Beyond Dichotomy

Do I have experience? Have I ever had any experience? I think that I do and I have had, but that is not true. It misses a point.

If I suppose that I have experience, the underlying assumption is that there is a particular experiencer (subject) and experienced (object). Here, I can find a dichotomy between subject and object. To see the dichotomy at a metaphysical level, the experiencer and experienced are the same. I do not have any experience, but I am any experience. Saturday, 8/5/2017

1368. 絶えざる更新と行進

先週末の日記を読み返していると、先週の土日はどちらも記憶に残る印象的な夢を見ていたことに気づかされる。無意識の世界がうねりを上げ、そのうねりを鎮めるかのように激しい夢を生み出しているかのようであった。それらは感情的にも強いものを持っており、同時に重要な意味を梱包しているような夢だった。先週末の夢について思い返していると、何の連鎖なのだろうか、昨夜の夢の断片を少しばかり思い出すことができた。

夢の内容というよりも、その夢が持つ主題の破片を見つけることができたと述べた方が正しいだろう。それは、「閉じられたものは開かれたものであり、開かれたものは閉じられたものである」という意味を持つ主題だった。今の自分にとって、閉じられたものが何であり、開かれたものが何であるのかというのはよくわかる。また、何かを閉じることと何かを開くことの意味についても非常に明快だ。

この主題が示唆していたのは、今の自分の生き方に対する肯定だった。極限まで閉じることは、極限に向けて開くことに等しいのだ。何をどのように閉じるのかもすでに明確なものになっていたのだが、それを一つの確信を持って進めていくことがこれまでは難しかったように思う。だが、今朝の夢の後押しもあり、これからは極限に向かって閉じていきたいと思う。

それこそが極限へ辿り着くための唯一の道であり、そこから大きなものに開かれていくための道でもある。先週末の夢が今朝の夢とどこかで繋がっているような不思議な感覚だった。無意識の世界で現れる夢は、意識のさらに深い層で繋がっているのだと思わざるえない出来事だった。

早朝、仕事の友であるコーヒーを入れた。コーヒーの香りが沸き立つキッチンへ向かうと、ふと、「魂」という言葉が自分にもたらす感覚が変化していることに気づいた。これまでの私は、日記の中でそれほどこの言葉を使うことはなかったように思う。というのも、その言葉の輪郭と中身を感覚を通して理解することが難しく、その言葉を使う際にはどこか違和感のようなものがあったからだ。しかし今は、「魂」」という言葉を使用することに対してそのような違和感を覚えることがなくなりつつあるのを実感している。

それはおそらく、私が自らの魂を見出しつつあることと関係しているだろう。ここから気づかされるのは、自分の中で見出していないものを言葉にすることなどできないということだ。また、仮に言葉が与えられていても、自分の中でその言葉の真意を掴まなければ、その言葉は全く意味をなさないのだと思う。「魂」という言葉に血が通い始めたことは、今の私にとってとても喜ばしいことだった。

一昨日あたりに、自分の知識と経験の総量がある閾値を超えていかなければならないということにはたと気づかされた。その時はこれまでのように、総量の不足についてあれこれ考えていたのではなく、閾値の境界線を更新していくことの必要性について考えていた。同時に、論文の存在意義と執筆理由についても再度考えを巡らせており、現在の断定的な自らの考えを拠り所に、絶えず論文を執筆していくことを通じて、その意義と理由を随時更新していくことが重要なのだと思った。

一人の人間の仕事というのは、絶えざる更新なのである。また、一人の人間が発達を遂げていくというのは、自分の内側の成熟の歩みに応じた絶えざる更新に他ならないのだ。そのようなことを考えさせられていた。

© YOHEI KATO 2018

ちらほらと雲が漂っていながらも、今のフローニンゲンの空は晴れ渡っている。今日もまたオンラインゼミナールのクラスがあり、今からそれを楽しみにしている。今日という一日の間において、私はどれほどの更新を経ることになるだろうか。その更新をもってして、新たな「行進」を始めることが重要なのだ。2017/7/30（日）

No.13: Ever-Present Enlightenment

My right hand, which is my dominant hand, can grasp anything. Yet, I found that my right hand couldn't grab one thing. That is my right hand.

It implies that people who insist that they have grasped enlightenment are an honest liar. Their statement equals the assertion that they have grasped their dominant hand with it. Unfortunately, I have never seen such a dexterous person. What my dominant hand cannot grab is ever-present enlightenment. Saturday, 8/5/2017

1369. 集合意識を持つ学習場

先ほど出版記念ゼミナールの第二回のクラスが終了した。画面共有をしてPreziを活用するのではなく、Adobe Connectの中でPPTを共有する形を採用することによって、前回抱えた音声トラブルを解決することができて一安心している。新しい技術を試す際には、色々と慎重にならなければならないということを教えられるような体験だった。今日のクラスもとりわけ意見交換が活発になされ、非常に実りあるクラスだったことを嬉しく思う。

一方で、土日のクラスごとの特色や温度の違いなどがあることは確かであるため、三回目のクラス以降からは、クラス内に有意義なダイナミズムが生まれるような場を作っていくように心がけたいと思う。次回のクラスがお盆休み前の最後のクラスとなる。こうしたオンライン学習において、いかに学びの場を作っていくかは極めて重要だということに改めて気づかされる。これまでのゼミナールは少人数で行うことが多かったため、最初のクラスでは受講者の一人一人に自己紹介をしてもらい、ゼミナールに期待することなどを共有してもらっていた。

こうした機会があることによって、自分の声をクラスの場に発することになり、さらには他者の声を聞くことになり、それがクラスへの関与を生み出していく。言い換えれば、自らの声と他者の声は、その場に安心していられることを促し、それが集合的な学びの場を醸成していくことにつながる。

今回の出版記念ゼミナールではなく、随分と昔のゼミナールの中で、一人の受講者の方が、クラスの内容が夢の中に出てくる、ということを共有してくれたことがある。この方の発言には深い洞察が含まれており、学びというのは実際のクラスだけでなされているものではなく、クラスが行われていない時間においても、そしてそれが夢の中のような無意識の世界においても学びは継続しているのだ。

それこそがまさに学びの特質であり、学びのダイナミズムの大きな特徴だと思う。これは何も学習者だけに当てはまる現象ではなく、講義をする私自身においても当てはまっている。特にゼミナールの前後には印象的な夢を見ることが多い。学習とは無意識の世界とのつながりの中でなされるものであり、時に学習は、肯定的にも否定的にも私たちのシャドーを刺戟する。

クラスの中で湧き上がる自分のシャドーやクラスを離れた場で浮かび上がるシャドーと向き合いながら学習を進めることは、より実りある変容的な学習を行うために不可欠となるだろう。ゼミナールの主催者である私自身も頻繁に自分のシャドーと向き合うことを余儀なくされており、同時に受講者の方のシャドーが見えるようなこともよくある。お互いに自分のシャドーに気づき、それと対峙しながら学習を進めていくことは成人学習においてとりわけ重要なことだろう。

特に、ゼミナールの主催者である私自身は、自らのシャドーと受講者の方のシャドーの投影に押しつぶされることなく、より良い学習環境を作ることに専念していく必要がある。学習における集合意識の醸成については、これからも探究を続け、それを実際の場に還元していきたいと思う。そのようなことを考えさせてくれる第二回のクラスだった。2017/7/30（日）

No.14: Unsophisticated English Vocabulary

Recently, the word “artificial intelligence” has been prevalent in various fields. “Human intelligence” is often used as an antonym of artificial intelligence. Interestingly, it seems that English does not or cannot distinguish artificial “intelligence” from human “intelligence,” although

Japanese has two distinct words; human intelligence (人間「知性」) and artificial intelligence (人工「知能」).

I suppose that the Japanese person who coined the two different words could discern a subtle difference between human intelligence and artificial intelligence. Saturday, 8/5/2017

1370. 流れぬ時の流れの中で

突然激しい雨が天から降り注ぎ始めた。ガラス窓に雨滴が激しくぶつかり、その轟音は、書斎の中で流れるモーツァルトのピアノ曲の音色をかき消してしまうほどのものだった。強く激しい雨のため、窓の外側の景色がもはや見えなくなっている。だが、それでも私は視界に広がる景色の向こう側を見ようとしていた。

絶えずこの世界で生きながらも、この世界の向こう側を眺めているような感覚がそこにあった。ガラス窓に打ち付けられる雨を眺めながら、来週火曜日からの北欧旅行に思いを馳せていた。いよいよ明後日から八月に入り、八月からは晴れの日が増えるだろうか。年間の降水量を確認すると、八月の降水量は七月の半分ほどのようだ。

来週火曜日からの北欧旅行において、天候に恵まれることを願う。もちろん、雨の降る北欧世界もまた一興だ。どのような天候であったとしても、その瞬間の自分の存在と、自分がそこにいるということを大切にしたいと思う。

気づけば激しい雨が止んでいた。激しい雨が通り過ぎた後の世界に、小鳥の鳴き声がこだましている。今日は日曜日ということもあり、道行く人の数も少ない。通り過ぎていくのは雲と時だけである。薄い灰色がかった雲が緩やかに東から西へ流れていく。時間はどちらに流れているのだろうか。

哲学者の大森荘蔵が指摘しているように、時はそもそも流れぬものなのかもしれない。常にここにあるのは今という瞬間であり、その瞬間瞬間を後々振り返ってみると、それが一つの流れであるかのように私たちは知覚するのだろう。時は流れないのだが、時の流れは間違いなく存在しているというこの逆説的な感覚は、私を当惑させることもなく、むしろ何か重要なものに触れているような優しい気持ちにさせてくれる。

午前中のゼミナールを終え、昼食を摂った後に、四本ほどの論文を読んだ。それらはどれも非線形ダイナミクスに関する数学理論と数学手法に関する内容だ。具体的には、フラクタル次元の分析方法、マルチフラクタルトレンド除去変動解析、非線形的時系列データ分析の方法などに関する論文を読んでいた。今からもう二本ほど論文を読み、その後は、先日購入した“Machine Learning: The New AI (2016)”を読み進めたい。

これはMIT出版から出された書籍であり、思っていた以上に分量が少なく、中身を一瞥すると、人工知能の初学者にとっても非常に読み進めやすい内容であるという印象を受けた。

流れぬ時の中で、時の流れを自らの内側に生み出していくためにも、今この瞬間の一瞬一瞬を自分の内側に刻み込むように歩みを進めたいと思う。2017/7/30（日）

No.15: Ground of Doubt

I am seeing the twilight, indulging in idle thoughts. However, I can feel something within me that is dynamically and constantly moving. If I doubt the existence of something, I unconsciously admit its existence because the doubt derives from the presupposition of the existence. Therefore, the disbelief of something extant approves its existence in a stealthy way.Saturday, 8/5/2017

1371. 真眼と死と魂

激しい雨が降り、晴れ間が見え、再び激しい雨が降り、晴れ間が見えるという運動が外の世界の中で繰り広げられていた。夕方、その運動は落ち着きを迎えたようであり、今は世界が輝く太陽に照らされている。時刻は夕方の五時前を迎えているが、辺りの様子は昼のようである。

書斎の窓ガラスには、まだ雨滴が少しばかり残っている。その雨滴を通して眺めることのできる世界は、黄金色に輝いて見える。目の前の木々が、さざ波のように通り過ぎていく優しい風に揺られている。書斎に置かれたバランスボールに腰掛けて外の世界を眺めるのではなく、食卓の椅子に腰掛けながら外の景色を眺めたいとふと思った。

より縦長な食卓の窓から、外の世界がよりはっきりと知覚された。夕方の爽やかでありながらもどこか一日の終わりに向かうあの侘しさを抱えた風が、目の前の木々を撫でるかのように通り過ぎていく。

その様子を何も考えることなしにぼんやりと眺めていると、そこに揺れる木々が奏でる旋律（メロディー）と律動（リズム）と和声（ハーモニー）を感じ取ることができた。これら三つの要素のそれぞれを感じる時、それら三つが全体となった一つのより美しい音楽を聴き取ることができたような気がした。

音楽とは、決してそれらの三つの単純総和ではないのだ。それらの部分が一つの有機的な全体をなし、音楽とは部分の総和を超えたものなのだということを知る。ここで私は、部分の価値を貶めているわけでは決してない。部分は不可欠な存在なのだ。なぜ私たちは部分を丁寧に見ることがほとんどなく、全体を見ることが極めて稀なのはなぜなのだろか。

一体私たちは、日々の生活の中で何を見ているのだろうか？どうやら私たちは、大事なものを見る「眼」を喪失してしまったかのようだ。それは単純に、自然が私たちに開示している諸々の真実に関するものだけではない。私たちは、自分自身に関する真実を見る眼が欠落しているのだ。私たちは、いつまで義眼をつけたまま内側と外側の世界を眺め続けるのだろうか。一体いつになったら、自分の眼を持って内外の世界を生きることを始めるのだろうか。

先ほど休憩がてら和書を少し読んでいた。森有正著『バビロンの流れのほとりにて』である。昨日か一昨日の日記の中で、ようやく「魂」という言葉が自己の存在と共鳴するようになり始めた旨の記述をしていたように思う。本書を読んでいると様々な箇所に「魂」という言葉があることに気づき、そのたびにその言葉を丸で囲っていた。とりわけ、「魂と魂を結ぶ死」という言葉と「死を通して人々は本当に一つになる」というセンテンスが、妙に自分の内側に染み込んでくる。

先週のある夜、就寝に向けて準備をしている最中、「人はやはり死なない」という言葉が咄嗟に浮かんできた。肉体はもちろんいつか必ず朽ち果てる。だが、朽ち果てずに永遠に残り得るものが確かにあるのだということに気づかされていた。

先ほどの私は、森先生の書籍を読んでいた。先生は自分が生まれる以前にこの世を去っている。しかし、森先生の言葉は、肉体の次元ではない場所に今も生き続けている何かがあるということを強く訴えかけているようだった。この感覚を言葉にするのはとても難しい。

© YOHEI KATO 2018

何かを託すことによって、一つの魂と別の魂が結びつけられる時、そこには決して死ぬことのない人間の本質的な何かが存在しているように思える。それは決して、濁りきった今の目で見ることなどできはしないのだ。それを見るための眼が必要であり、それを持って日々生きるということが、一人の人間として本当に生きるということを意味するのだろう。そうではないだろうか。2017/7/30（日）

No.16: A New Day

A peaceful and vivacious day started again. Yet, I am wondering whether a new day really begins or not. A day is an artificial unit of time. A day is not a discrete entity, but a continuous one. Everyday is in a perpetual flow of ever-present moment. Sunday, 8/6/2017

1372. 名付けの責任

午後八時半を迎えた。そろそろ一日の仕事を終え、作曲の学習と実践をしたいと思う。その前に、今日の最後の日記を書き留めておきたい。ふと拙書『成人発達理論による能力の成長』で紹介した「知性発達科学」という言葉について思いを巡らせていた。

この言葉を使うようになったのは欧州での生活を始める直前であったか、あるいは欧州に来てからであったかのどちらかだろう。いずれにせよ、その言葉を用い始めてまだ日が浅い。この言葉はある意味、自然な形で必然的に生まれたものだと思う。そもそも、この言葉は広辞苑などに載っているようなものでは決してない。なぜなら、それは私の造語だからである。

数年前の私は、自分の探究を「発達心理学」という学問領域の範疇の中で行っていた。実際に、当時の私は、発達心理学に関する専門書や論文を読むことを通じて自らの研究や仕事を行っていた。しかし、それから数年が経ち、特にこの一年の間において、もはや自分の探究が発達心理学の枠に収まらないことを感じ始めていた。事実、発達心理学の枠組みから離れ、様々な学問領域を横断しながら探究を進めている自分がいた。

だが、そこで共通していたのは、人間の知性を扱うということであり、同時に、人間の知性が発達していくという現象であった。また、それを科学的な手法を用いて探究していくという見逃せない点があることに気づき、結果として「知性発達科学」という言葉を自らの探究活動に当てるようになった。

今は、知性発達科学を中心に、そこからさらに、人間の知性の発達を哲学的な観点から捉えていく探究に従事している。気づかないうちに、自分の探究領域が拡張し、それによって随分と人間の知性の発達に対する捉え方が変化してきたように思う。

それを考えると、今後の探究活動に対して、また別の意味付けをする日が来るかもしれない。自らの探究と内面が深まっていけば、おそらくその日はいつかやってくるだろう。その日を迎えるまでにとりわけ重要なのは、名付けの責任を持って歩み続けることだ。造語の責任は重いことを知っている。しかし、当時の私は名付けることによってしか前に進むことができなかった。

自分が日々従事していることの意味は何なのか、それに名前が与えられぬままではどうにも前に進めなかった。安易な名付けほど無責任な行為はない。名付けるという行為は、名付けられるものに愛情を注ぐことであり、それを真に育んでいくことでなければならない。私たちに子供が生まれ、名付けをするというのはまさにそれを端的に示しているのではないだろうか。

今の自分は、自らが名付けた「知性発達科学」というものをどれだけ深めていくことができるのかわからない。だが、それに対して無上の愛情を注ぎたいと思う。そして、それを大事に育んでいきたいと思うのだ。それは、名付けをした者が果たすべき最低限の責任である。

時刻が九時に迫り、外の世界が黄昏時の雰囲気を醸し出している。ほのかな黄色を放つ夕日。そしてそれに照らされた木々の葉が、一日が終わりに近づいていることを静かに告げている。暮れ行く夕日を眺めながら、いつか私はまた日本で生活する日のことを思った。北海道、長野、あるいはより特定の場所としては、高野山で生活をしたいという思いがふつふつと湧き上がる。

それらのどこかの場所で生活をする日が近い将来にやってくるとは到底思えないが、遠い将来その日はやってくるだろう。そしてそれを密かに願う自分がいる。自分の前途には、通過しなければならない場所が無数に存在している。そのようなことを思いながら、ここで筆を置き、明日に筆を渡したいと思う。2017/7/30（日）

© YOHEI KATO 2018

No.17: Variable and Invariant Existence

I am witnessing everything come and go within me. What always surprises me is that I am constantly surrounded by an infinite number of dynamically changing phenomena. Strictly speaking, I am also a part of the dynamically changing existence. What is invariant existence? That is the transcendental ground of all existence. Sunday, 8/6/2017

1373. 余白

今朝は頭の中がとても静かだ。書斎の窓から見える木々も静かに風に揺られている。ここ数日間に引き続き、昨夜も夢を見ていたのだが、どうにもその印象が鮮明ではない。なにやら記憶に留めておかれることを避けているかのようだ。断片的に覚えているのは、二本しかない線路を持つ田舎の中を電車で移動していたということだ。電車の中で私は、小学校時代からの友人とAdobe Connectを通じてオンライン通話をしていた。

一人分でログインすればいいものの、私は七人分でログインしていた。通話画面には七人の私と一人の友人が表示される形となった。友人が会話を開始し、会話を後から聞き直すために録音ボタンを押そうとしたが、ボタンが少しばかり見つかりにくかった。また、友人が七人の私のうちどの私に話しかけているのかもよくわからなかったため、私は何人分かの私をログアウトしようとした。

友人との会話は時間としては長くなく、数分間ぐらいで会話を終了した。すると電車がある駅に到着した。どうやらそこが自分にとっての目的地だったらしく、私は電車から降りた。プラットホームに足を着けた瞬間、酒に酔っているかのように足元がふらつき、その場に倒れた。しかし、その倒れ方は決して激しくなく、意図的ですらあった。

この片田舎の駅のプラットホームは幅が広く、そこに倒れることは全く危険なことではなかった。電車から降りてくる人の目につくように、わざと自分はその場に静かに横たわったのだということがわかる。というよりもむしろ、自分は休憩が必要のようだった。プラットホームの上に横たわることによって、少しばかりその場で休みたかったのかもしれない。だが、私はすぐに起き上がり、再び歩き始めることにし、プラットホームから姿を消した。

そのような夢を見た。夢から覚めた後、早朝の自分の頭の中が静かであると表現したが、どうもそうではないようだ。頭の中が何かで一杯になっているがゆえに、動きが鈍重であるがゆえに静かに見えるだけのようなのだ。昨夜は十時に就寝し、起床も六時少し前であったから、普段取りの就寝時間かつ起床時間であり、睡眠時間も十分に確保されている。

しかし、どこか脳と思考のどちらもが、何か大量のもので満たされており、余白がないような印象を受ける。そうした隙間のなさが自由な運動を妨げているように思えて仕方ない。早朝の仕事に取り掛かる前に、少しばかり仮眠を取る必要がある気がしている。今日の活動の開始は、いつもより緩やかなものにしたいと思う。

No.18: Multilingual

I sometimes notice that I am utilizing various types of language everyday. They include not only three natural languages──Japanese, English, and Dutch──but also mathematical, music, and programming languages.

Viewing from a more macro perspective, I think that all of us are multilingual somehow even though we are not using a different natural language in our daily life. We are always participating in various types of language game. We are inherently living in the world suffused with diverse languages. Sunday, 8/6/2017

1374. 睡眠と治癒

つくづく睡眠というのは重要であり、不思議な力を持っていると思った。昨夜はいつも通りの時間に就寝し、起床時間もいつもとほとんど変わらなかったのだが、今朝は少しばかり脳と心が何かで一杯になっているような感覚があった。つまり、脳と心も活動を始めるにはふさわしくない状態であり、動きが生み出されない感覚があったのだ。そうしたこともあり、先ほど一時間ほど仮眠を取っていた。

仮眠から目覚めると、脳と心を満たしていた重たいものがどこかに消え去り、活動に向けた気力が溢れてきた。睡眠がもたらす力をなんと形容したらいいのだろうか。それは私たちに治癒をもたらし、回復をもたらす。睡眠というのは、私たちになくてはならない不可欠なものなのだと改めて知る。

仮眠後、コーヒーを入れ、コーヒーを飲みながら過去の日記を少しばかり読み返していた。ちょうど読み返していたのが、先週の今日、つまり先週の月曜日に書かれた日記だった。日付の合致のみならず、その日記を読み返すと、偶然にも先週の月曜日も似たような状態を体験していることがわかった。その時は、仮眠中に白い閃光を知覚していたようだった。

早朝の時刻にさらに仮眠を必要とする状態をもたらす原因を一つに絞ることはできないが、どうも毎週末に行っているゼミナールと何か関係があるのかもしれないと思った。ゼミナールでの体験が自分にとっても大きな意味を持っており、それは自分の無意識に揺さぶりをかけるようなものでもあり、それでいて変容をもたらし得る経験のようなのだ。とりわけ、今回のゼミナールの受講者の人数が多く、その分だけ集合意識も巨大なものになり、集合意識の渦巻く力も巨大である。そうした集合意識に身を置く一人として、様々な体験を意識的・無意識的に経験していることがわかる。

土日のゼミナールを終えた次の日に、自己の回復と治癒が必要だというのもどこかうなづける。変容的な学習というのは、このように無意識の世界にまで影響を与えるものであり、その影響が強ければ強いほど、変容作用も大きくなるが、学習過程においては回復と治癒の時間も必要だということを忘れてはならないだろう。

来週の明日、いよいよ北欧旅行に出かける。書斎のソファに腰掛けながら、いつもとは違う方角の空をぼんやりと眺めていた。心が晴れ渡り、広大な空間が開けてくるかのような感覚に包まれる。出発当日も今日のように晴天であることを願う。

今日は午前中に、サスキア・クネン教授の論文の中で引用されていた“Dynamic Systems Biology Modeling and Simulation (2014)”を読み進めたい。本書は900ページ近い専門書であり、中身と構成がいかにも大学のテキストらしい作りになっている。また、本書は生物学に関する内容であり、分野だけを考えれば自分の専門分野とは関係がない。しかし、以前の日記で書き留めたように、生物

学の領域は、ダイナミックシステム理論を活用したシミレーション技術が進歩しており、そこから学ぶことが多々ある。

本書を購入しようと思った動機もまさにそこにある。本書を通じて、ダイナミックシステム理論を活用したシミレーション技術に関してより理解を深め、それを自分の研究に活かしていくことを目的に、今日はこれからこの書籍に取り掛かりたい。一日の大部分の時間を充てることによって、なんとか今日中に一読目を完了させたいと思う。2017/7/31(月)

No.19: Nutrition

Rich nutrition facilitates our physical body, and many people care about what they take for their body. However, how many people consider what they take for their mind and soul? How many people deeply reflect upon what nurtures their mind and soul?

Finally, how many people can notice that our spirit is beyond the attempt to foster our body, mind, and soul? It is preposterous to try to foster body, mind, and soul without finding our spirit. It is always here and there at this moment. Sunday, 8/6/2017

1375. 何気ない月曜日の午後

早朝の仮眠のおかげもあって、心身がとても爽快な感じがする。昼食後、散髪をしに出かける。来週の火曜日から北欧旅行が控えており、その前に髪をスッキリさせたいと思っていた。自宅を出発すると、爽快な夏空が広がっていた。

七月のオランダはどうも雨が多く、このところ天気が優れなかったが、今日は幸いにも晴天である。散歩日和というのはまさにこのことを言うのであり、美容室に行くまでの足取りはとても軽やかだった。美容室に到着すると、いつもは閉じられているガラス扉が開いており、中に入ろうとすると、かかりつけの美容師であるロダニムが笑顔で出迎えてくれた。どうやらその他にお客はおらず、他の美容師もいないようだった。

ロダニム曰く、今日出勤しているのは彼だけとのことである。いつもは美容師と客の間で和やかな会話がなされているのだが、今日はそうした光景を見ることはできず、とても静かである。静かな室内

に夏の午後の太陽光が優しく差し込んでいる。太陽光が美容室の鏡に反射し、店内は明るく輝いているように見えた。

オランダでは、各種のお店が月曜日に閉まっていることが多く、月曜日に休みを取る美容師も多いらしい。いつもはロダニムの予約は一杯なのだが、今日は自分の後にはしばらく空き時間があるらしかった。そのため、いつも以上にゆっくりと雑談をしながら髪を切ってもらった。今日の雑談において、私は真っ先にロダニムにお礼を述べた。

というのも、前回の散髪時に、北欧旅行の計画についてこちらから話をした時に、ノルウェーに行くのであれば、デンマークに立ち寄ってみることを勧めてくれたからである。その勧めもあり、実際に来週の火曜日からの旅行は、まずデンマークのコペンハーゲンに向かう。ロダニムとの会話がなければ、私はデンマークを経由することなくノルウェーに直接足を運んでいただろう。ロダニムもつい先日スペインに近い島に旅行に出かけていたようであり、九月にはオランダ北西部にある「テセル」という島に足を運ぶそうだ。

私の論文アドバイザーのサスキア・クネン教授も以前にフローニンゲン北部の島を勧めてくださり、どうやらオランダには観光地になっている島が色々とあるらしいことがわかる。ロダニムとクネン教授の勧めもあり、いつかオランダのどこかの島に足を運んでみようと思う。

いつもロダニムとの対話から何かと新しい発見があったり、新たな行動を起こしてみようというような気になるのだが、今日もそうだった。何気なくサッカーの話になったところ、ロダニムはフットサルのチームに所属しており、かなり本格的にこの競技に打ち込んでいることがわかった。今はちょうどリーグ戦の時期であり、毎週金曜日に試合があり、平日もトレーニングを行っているらしい。そうしたトレーニングの成果が彼の身体に如実に表れていることに気づかされる。

私も大学時代にフットサルをやっており、ロダニムの話を聞きながら、彼のように本格的に毎週行うのではないにせよ、久しぶりにフットサルをしたいという気持ちになった。そういえば、今年の年初に日本からフローニンゲンに戻ってくるときに、アムステルダムからの列車の中で、偶然ながらフローニンゲン大学の物理学の博士課程に在籍している中国人と出会い、彼もフットサルをしているという話を聞き、その時もこの競技を久しぶりに行ってみたいという気持ちになっていた。残念ながら彼の

連絡先を聞くことを忘れてしまっていたため、その後実際にフットサルをする機会はなかった。この件についてはまた少し考えようと思う。

無事に散髪が終わり、お礼と共に「これで北欧旅行の準備が整った」と私はロダニムに述べ、美容室を後にした。社会科学キャンパスの図書館で人工知能に関する論文を二本ほど印刷しようと思い、フローニンゲンの街の中心部から大学に向けて歩き出した。

空が水色に染まっており、爽やかな風が吹き抜けている。ノーダープラントソン公園の入り口に差し掛かった時、公園内の動植物が躍動しているかのように見えた。青々とした木々の葉がひときわ強い生命力を放って輝いていた。今日が月曜日であることをすっかり忘れさせてくれるような午後だった。2017/7/31(月)

No.20: Rest for Finding Spirit

Diving into a vast tranquil ocean of consciousness makes me peaceful and spirited. It is my definition of rest. Such a rest is vital for me to relax all aspects of my existence──body, mind, and soul. I feel that such a rest is a sagacious way to find my essence, namely, spirit.
Sunday, 8/6/2017

1376. 寺田寅彦・川端康成・小林秀雄

不思議な感覚の中、今日という一日を終える。それが日記であったとしても、自分が何か文章を綴ることが卑しい行為であるかのように思えるような一日の終わり方だった。確かに今日は、午前中を迎えるまではいつもと同じ生活を送っていた。早朝に自らで計画を立てていたように、“Dynamic Systems Biology Modeling and Simulation (2014)”を夕方までに読み終えることができた。

しかし、夕方から小林秀雄の存在が気になり、彼について調べてから様子がおかしくなった。数年前から少しずつその存在が気になっていたのだが、いよいよ小林秀雄の文章を読んでみなければならないような感覚に突如として陥った。新潮社から全28巻ほどの全集が出版されており、そのうちの9巻がとりわけ自分の関心に合致しているように思えた。森有正氏にせよ、辻邦生氏にせよ、彼ら

の主題が何であったのかということが自分の中で浮き彫りになりつつあり、それに共感するがゆえに、私は彼らの作品を現在読んでいる。

だが、小林氏に関して言えば、彼を貫いていた主題というものが一体何なのかまだ全く見えない。そうした状態にあっても、なぜだか彼の文章を読む必要がある、という確かな感覚がある。そこから私は偶然的かつ必然的な流れで、川端康成氏の作品にも強い関心を示すようになった。いや、より正確には彼の作品そのものというよりも、川端氏が持っていた特殊な眼に対して、取り憑かれるかのような関心を持ったのだ。

いつだったかは全く覚えていないが、誰でも一度は読んだことがあるであろう川端氏の代表作『伊豆の踊子』と『雪国』を読んだ記憶がある。作品の内容に関しては一切覚えておらず、読了後に何を感じたのかすら覚えていない。

先ほど、川端氏と伊藤整、そして三島由紀夫の三名が対談している今から数十年ほど前の動画を見た。川端氏を見てすぐに気づいたのは、どこか人間らしからぬ妖気を放っていることだった。じっと彼の様子を観察していると、彼は肉体の眼ではなく、魂の眼を通じて現実世界を眺め、さらには異界までも見通していたのではないか、ということを感じた。そこからどっと溢れ出すように川端氏について興味を持った。

この感情は、言い表すことのできぬ不気味な関心であることは言うまでもない。小林秀雄全集と同様に、新潮社から川端康成全集全35巻が出版されていることを発見し、とりわけ関心のある『たんぽぽ』と『みづうみ』が収められた第18巻と日記が収められた補巻、そして随筆が収められている第26巻から第28巻までを購入したいと強く思った。埴谷雄高氏の『死霊』と出会った時と同じような感覚が自分を取り巻いている。『たんぽぽ』と『みづうみ』という二つの小説はそれぐらいに気になる作品だ。

以前の日記で書き留めていたように、私は小説を読むための能力が欠落しており、小説家である川端氏の小説以上に、彼が残した随筆と日記にとりわけ強い関心がある。全集のうち補巻と第26巻から第28巻に着目したのはそのためだ。そして、川端康成から最後に行き着いたのは寺田寅彦である。物理学者かつ随筆家でもあった寺田氏については、以前知人の方から話を聞いていた。

それ以降、どこか私の頭の片隅には寺田氏がいたのだが、なかなか彼の文章を読む機会がなかった。だが、寺田氏の文章を読んでみたいという欲求を押させることはもうできそうにない。岩波文庫から全5巻の随筆集が出版されているようであり、今度の一時帰国の際に是非とも全て読んでみたい。

寺田寅彦、川端康成、小林秀雄の三人が残した仕事について思うとき、黙らざるをえないという気持ちにさせられる。黙らされながらでも、なんとか自分の声を見つけたいという気持ちで一杯になる。明日からまた、自分にできることを一つずつ積み重ねていこうと思う。2017/7/31(月)

No.21: Trivial Questions About AI

What if artificial intelligence has a dream at night? Of course, it does not matter here whether it is a good dream or bad dream. If artificial intelligence has a dream, how can it do that? When we, human beings, have a dream, we have a dream body──subtle body──in a dream world.

Can artificial intelligence have such a different type of energetic body? If artificial intelligence attains "satori," what does that look like or how can artificial intelligence experience it? I am in a vortex of myriad of trivial hypothetical questions about artificial intelligence. Sunday, 8/6/2017

1377. 魂と言葉:神道と国学

早朝三時に起床し、書斎に駆けつけ、メモを取った。明かりをつけることなくその場でメモを取っていたものだから、メモの字がとても汚い。裏紙に走り書きされたメモを読んでみると、「言葉は魂を包む衣である」と書き残されている。その言葉に続いて、「衣としての言葉が裸であってはならない」と書かれている。

起床してそれらのメモを改めて眺めてみると、すぐにはその意味が掴めなかった。だが、昨夜未明の私は夢の中で何か重要なものを掴んでいたようであり、目を開けた瞬間に書斎に駆け寄っていた。「言葉は魂を包む衣である」というのはどのような意味だろうか。思うに、この文章が意味しているのは、言葉というのは魂に触れているものであり、言葉には当人の魂の性質が如実に現れるということなのかもしれない。

また、「衣としての言葉が裸であってはならない」というのは、言葉の重みについて示唆しているように思える。自己を取り繕うような偽りの言葉ではなく、そして中身のない表面的な言葉ではなく、魂に密接した重みのある言葉の使用を示唆しているように思える。昨夜未明の私はなぜこのようなことをメモしたのだろうか。

昨夜、突如として神道に関心の矢が向かった。儒教や仏教というのはそもそも外来の思想であり、日本古来の土着思想ではないことにはたと気づかされた。日本古来の思想は神道であるということに突如として気づかされるような出来事が昨夜に起こった。荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤などの国学者の存在がとても気になり始めた。

欧州の思想風土の中で生活を始めて以降、徐々に自分の中で日本古来の伝統的な思想に対する関心の芽が育まれていったのかもしれない。今この瞬間に何か探究活動を始めるわけではないが、神道と国学、そして日本を代表する江戸時代の四人の国学者の存在は、自分の頭の片隅に絶えずあり続けるだろう。

今日はいつもより睡眠時間を多く取った。昨日の件もあったため、普段以上に十分な睡眠を取り、早朝の仕事をゆったりとした気持ちで始めることにした。早朝の空はうろこ雲で覆われており、太陽の光をほのかに下界に運んでいる。

昨日、真の意味で始めて出会った川端康成の印象がまだ自分の内側に色濃く残っている。自分独自の文体を確立した後、多くの小説家はそれを元に執筆活動を行う傾向にあるのに対し、川端氏は絶えず自らの文体を変容させていったという。常に自己を成熟させ、認識世界の奥へ奥へと絶えず向かっていく絶え間ない運動が、生涯を通した川端氏の文体変容に繋がっていたのではないかと思う。本来、内面が成熟すれば、それに応じて捉えられる世界が変化し、認識されるものを表現する文体は必然的に変容していく。

そのように考えれば、川端氏は絶えず自己を変容させることを宿命づけられた存在であり、それが一生涯にわたる文体変容を引き起こしていたように思える。そこではたと昨夜のメモについて思いが向かった。

© YOHEI KATO 2018

魂の成熟が進行していけばいくほどに、それを包む衣としての言葉は変わらざるをえないのだ。魂が捉えるもの、そしてそれが表現を望むものが変容していくことに伴い、それを包む言葉も変容を遂げ、それが文体の変容を促すのだ。そのようなことをぼんやりと考えながら、自分の文体について思いを巡らす。2017/8/1(火)

No.22: Prime Numbers and the Highest Common Factor in Japanese and English

Keeping a diary in English is a pivotal effort to discover my authentic thoughts and feelings in English, which are never originated from Japanese.

I have recently noticed that I cannot reduce my thoughts and feelings cultivated in Japanese to those derived from English. Here, I can see an impossibility to translate my subjective experience stemmed from one language into those cultivated in another language.

Also, I can see my inner world possessing two distinct experiential realms that are corresponding with Japanese and English respectively. I would like to discover "prime numbers" and the "highest common factor" in Japanese and English by keeping a diary in both languages. Sunday, 8/6/2017

1378. 日本を発ったあの日から

昨年の昨日は、欧州に向けて日本を出発する前日であった。あれから一年が経ち、当時の自分は何を思い、どのようなことを考えていたのかを知る意味で、先ほどその日の日記を改めて読み返していた。昨年の日記には、下記のようなことが綴られていた。

****

――後に続く者あるを信ず――神風特攻隊

出発前夜、成田空港の近くにある「ホテル日航成田」に宿泊することにした。今、ホテルの自室でこの記事を書いている。成田空港に到着するまでの電車の中で、私は窓から見える景色をぼんやりと

眺めていた。電車の窓枠が絵画の額縁になったかのような錯覚に襲われ、額縁の中に動く雪山を見つけた。

それは本物の雪山ではなく、雪山のように見えた積乱雲の塊である。そういえば、米国時代にこのような積乱雲を見かけたことはほとんどなかったのではないかと思わされた。最後の最後に、日本の気候が作り出す格別のお土産を受け取ったように感じた。

日本のこの固有の時の流れ方、夏のこの空気の香り、それら日本でしか感じることのできないありとあらゆることを、私は決して忘れたくないと生まれて初めて思った。この先、日本で生活をする日がいつになるのか正直全くわからない。

昨年のように、今後の人生のどこかのタイミングで日本に戻り、一時的に日本で生活をするかもしれない。しかし、その時はしばらく訪れないであろうということを、直感的に知ってしまっている。だからこそ、そして今この瞬間だからこそ、日本が持つ固有の「日本性」の全てをありのまま感じることができると思うのだ。

成田近郊の街のネオンに日本が顕現されている。手元にある日経新聞に日本が顕現されている。ホテルの自室に備え付けられている歓迎用の煎茶の茶葉に日本が顕現されている。そうしたことを思うと、抑えがたく込み上げてくるものがある。

出発を前にして、私の中で立てた誓いを確認する。それは、明日から始まる新しい人生において、発達科学者として人間の発達に関する「真」の追究のみならず、現代社会から抹消されつつある「美」や「善」の領域の追究に全身全霊を注いでいくということ。そして何より、自分の生命の灯火を極限まで燃やし続けながら生き抜くことはできるのか。それに挑戦し続けたい。究極的にはこれなのだ。

こうした生き方を希求し、実践し続けた辻邦生先生や森有正先生のような先人を信じ、そして後に続く者をただ信じて、ひたすらに進んでいきたいと私は思う。2016/7/31夜

****

昨年の日記を読み終えた後、私は内側の奥深くに入っていくような感覚に浸っていた。それはとても静かな感覚だった。あの日の私がどこにいて、何を思い、何を感じていたのかがありありと蘇ってきたのである。当時の私が、とりわけ日本性を大切に思っていることが伝わって来る。

だがそれは、私が一方的に日本への思いを表明しているだけに過ぎない。一年経った今は、日本性に対する思いはさらに強まりながらも、自己を深めることが日本性を深めることに繋がり得る、という両者の間の互恵関係を捉えている自分がいる。一方で、あの当時と変わらないのは、日本固有の時の流れや空気の香りなど、日本でしか育まれえぬものに対する思いである。

八月に入ったというのに夏を感じさせない涼しい気候の中に身を置き、赤レンガの家々が目に飛び込んでくるたびに、これは日本的世界ではなく、オランダ性が具現化された世界なのだと改めて知る。今私はオランダで生活することを通じて、これまで培ってきた思考や感覚を全て吟味し直し、全く新たな思考や感覚を育んでいくことを余儀なくされている。そして、それを望む自分がいるのも確かだ。だが、新たに育まれる思考や感覚を見えないところで支えているのは、やはり母国で培われた思考や感覚であるに違いない。

昨年の出発前夜に確認した誓いを、今の自分はどれだけ守れているだろうか。あの夜から今にかけて、自分はどれほど前に進んできたのだろうか。真善美の探究に全身全霊を捧げるという思いは今も変わりがない。自己の生命の灯火を極限まで燃やしながら日々を生きようとする姿勢も変わりがない。変わったものがあるとすれば、そうした思いと姿勢を絶えず持ちながらも、それらを超えた場所を常に透徹した眼差しで見つめているということだろう。そこには魂と幸福があり、魂が幸福さを感じ、幸福さが魂となっている場所なのだ。

あの時の私は、遥か彼方に存在する自分から自分へと言葉を伝えていたようだった。であるがゆえに、「後に続く者」というのは決して他者を指しているわけではなかったのだ。

あの時の自分が、いや遥か彼方に存在する自分が信じていたのは、未来永劫に渡って歩き続ける自分自身の存在に他ならなかったのだ。その先に待つ自分へ還る者、すなわち後に続く者として、今日からまた一歩の歩みを進めたい。2017/8/1（火）

No.23: Wish to Construct Gargantuan Semantic Networks

I wish I could become a Theraphosa blonde──one of the largest spiders in the world── or the internet, both of which can construct massive networks. Of course, this is a metaphor, and it represents my aspiration to build gargantuan semantic networks by words. To accomplish it, I need to continue to write everyday even if it is a small step. Sunday, 8/6/2017

1379. 昨年の自分からの手紙

さわさわと風が流れていく。今日は薄い雲が空を覆い、太陽の光を拝むことはできない。しかし、雨雲がないためか、鬱蒼とした感じでもない。ノルウェーの作曲家ハラール・セーヴェルーのピアノ曲が書斎に鳴り渡っている。「あぁ、これが北欧なのか」という言葉が自然と漏れた。クリスタルの光がきらめくようなピアノの音が奏でられ、それでいてその背後には豊かな自然を感じさせるような不思議な音の世界が広がっている。

セーヴェルーの音楽に対する今の私の印象はそのような言葉で表される。来週の今日は、北欧旅行に出かける日だ。奇しくも昨年の今日は、日本を出発した日だった。昨年の出発と来週の出発について、少しばかり思いを巡らせていた。

昨年の今日、私は欧州に向かうための飛行機を待ちながら、成田空港のラウンジで出発前の最後の日記を綴っていた。その日記を再度読み返してみると、次のような内容のものだった。

****

──人が自己の根底に持つオリジナルな本源的な知覚。それの探求のために、考究のために、また検討のために、人は出発するのだ──森有正

日本を離れる時が来た。今日という出発の日は、どんよりとした雲が空を覆っている。だが、雲の合間からわずかばかり青空がこちらを覗いている。現象の表面に囚われず、絶えず本質を捉えようとすること。表面的に見えている雲の大群の裏には、紺碧の青空が広がっているということ。そして、紺碧の青空のその先には、広大な宇宙が存在しているということ。それを忘れてはならない。

そんなことを思いながら、チェックインカウンターに向かった。そこで思わぬ光景に遭遇した。リオデジャネイロ五輪の日本代表陸上選手一行がニューヨークへ出発するということで、報道陣が大勢駆けつけていた。おそらく、同じような思いで、そして一人一人異なる意味を携えて、彼らと私は日本を出発するのだろう。

多数の報道陣を後にし、私は外貨両替場に向かう。オランダのフローニンゲンではクレジットカードの利用が不便であるから、一ヶ月分の生活費をユーロに替えておいた。ヨーロッパの広大さに比べ、ユーロ紙幣の小ささに思わず笑みがこぼれた。

手荷物検査を終え、パスポートに出国スタンプが押された。このスタンプが「入国」に変わる日付はいつになるのだろうか。いつかその日が来ることを思いながら、空港のラウンジへ向かう。

空港のラウンジから、一機、また一機と飛行機が飛び立っていくのが見える。そして、一機、また一機と飛行機がやって来るのも同時に見える。日本から世界へ、世界から日本へ。

今の自分の心境を「希望で満ち溢れている」と表現することは、極めて不適切だと感じている。「無」という大海の中に、一粒の希望を投げ入れた時に生まれる波紋のような感覚なのだ。大きな波紋がだんだんと小さな波紋になり、無に還っていく様子が心の眼を通して見える。

私の今の気持ちは、希望という名の小石であり、小石が生み出す大きな波そのものであり、それが徐々に小さくなって無に還っていく変化そのものであり、無そのものなのだ。こんな気持ちを二度と味わうことはないだろう。

焙煎した一杯のコーヒーをラウンジで味わうのと同じぐらい、この気持ちを十分に味わうことは重要であり、全くもって重要でもないのだ。そんなことは本質ではなかった。全てを飲み込む無の世界を突き破ってでも、そこを通って進むしかないのだ。ただ一点、この「それでも進む」という己の姿勢にのみ、自己の本質を感じる。

自分には前も後ろも関係なく進むことしか、ただひたすらに進み続けることしかできない。それが私という一人の人間なのだと思う。フライトの時間が刻一刻と静かに忍び寄り、そして堂々と自分に向かってくる。

© YOHEI KATO 2018

自己の目醒めからの出発。そして未知なるものへの出発。それは、ヨーロッパという未知なるものかもしれないし、そこで生まれ変わる未知なる自分へ向かっての出発かもしれない。人間の成長とはつまるところ、こうした出発の繰り返しなのだろう。常に常に出発する。いつもこの瞬間も新たな始まりなのだ。自分には始点しかないのだ。

始点から出発し、再び新たな始点に行き着く。この過程を取り巻くものは絶望なのか、希望なのか。いずれだとしても、もう自分は次の始点へと向かって進むことしかできない。一点の曇りもないこの断固とした思いを携えて。

空港内のラウンジを見渡すと、様々な人たちが自分を取り巻いていることに気づく。目を輝かせている子供たち。神妙な面持ちでパソコンを眺めているビジネスパーソンたち。ラウンジを片付けている人たち。これら全ての人たちと共に私の世界があるのだと思った。フランクフルト行きのフライトの時間が迫ってくる。

刻む秒針のリズムに合わせて、張り詰めた私の魂が高鳴っていく。真夏の日本に深呼吸して、私は出発することを腹にくくった。二度と戻れぬ今という自分に別れを告げて。

ついにフライトの搭乗アナウンスが響き渡った。私は「一足入魂」の思いで日本の大地を噛み締めながら搭乗ゲートに向かった。ゲート近くにある大きなな窓ガラスから曇り空が見える。肉体の眼だけで世界を見ないこと。心の眼で、いや、魂の眼でこの瞬間に広がる世界を見ることが大事なのだ。

私の視線の先には、広がる紺碧の空があった。魂の視線のさらに先には、新たな世界への出発があった。2016/8/1

****

昨年の今日、私はそのような内容の日記を綴っていた。一年経った今読み返してみても、当時の自分の思いや感覚が行間から滲み出していることを感じる。あの日の私は、人間の成熟過程とはつまるところ、出発の連続であり、いかなる瞬間も出発の始点であると述べていた。その言葉を聞いて、今の私もやはり同じことを思う。

そこで私は少しばかりハッとする思いに駆られた。この一年間、欧州の地に足を踏み入れてから今日までの間、自分が一切の仕事を始めていないことについて悶々とする思いを抱え続けていたように思う。しかし、自分の仕事を始めていないという解釈は間違ったものであり、それが形になるかどうかは別として、私は絶えず自分の仕事を始めていたのだと思う。それも毎日だ。

毎日毎日、新しい出発があったはずなのだ。この一年間の日々は、全て新たな出発であったはずであるし、今朝の目覚めと共に新たな出発が始まっていたのである。私は一年前の今日の自分が述べていた、出発の連続性について本質的な事柄をわかっていなかったのだ。

昨年の自分もどうやらこの肉体の眼だけでは捉えられないものを認識しており、それを捉えるための眼を育もうとしている様子が伝わって来る。その姿勢に対して、今の私も大きな共感の思いを寄せる。同時に、この日記を読む前に視界に入っていた、薄い曇り空の向こう側を見ていなかった自分を反省させられた。肉体の眼を通して眺めれば、それは曇り空しか見えない。

だが、心の眼や魂の眼を通して眺めれば、全く違ったものが見えてくるはずなのだ。肉体の眼に惑わされず、心の眼や魂の眼を通じてこの世界を認識するようにしたい。その認識世界の中に真の幸福と生の充実があるはずなのだ。目の前に見える曇り空のその先に、紺碧の空を知覚し、そのさらに先に無限の宇宙を見る。

昨年の自分の日記は、今日の自分に送られた大切な手紙のように思えた。今日は母の誕生日であるから、お祝いのメッセージを母に送ろうと思う。2017/8/1（火）

No.24: Toward the Condensation of Affluent Meanings and Senses

Whereas the sun is slowly going down, the vital force within me to create meanings and senses is rapidly arising. That is an irrepressible energy to encourage me to engage in meaning-making and sense-making. Others might ridicule such an impulse, but I would like to follow it in a serious and rigorous way. Continuously pursuing the driving force would navigate me toward the condensation of affluent meanings and senses. Sunday, 8/6/2017

1380. 親としての著者、子としての書籍

昨年の日記を早朝に一つ、午後に一つ読み返していた。以前は過去の日記を編集していた都合上、再度日記を読み返すことがあったが、今は書き留める事柄があまりにも多いため、日記を読み返す機会はめっきり減っていた。だが、改めて昨年の日記を読んでみて、気づかされることが多々あったように思う。昨夜、文章を書くことに関して偉大な仕事をしてきた幾人かの日本人の姿を見たとき、自らの文章をとても恥じる気持ちがあった。

「恥」という気持ちの性質や意味についてはここで触れないが、とにかく少し沈黙させられるような感覚があったのは確かである。しかし、昨年の日記を読み返すことによって、やはり自分はそれがいかに駄文であったとしても、文章を書きながら前に進もうと思った。いや、そうしなければ生きることができないのだという思いを確認させられた。

午前中と昼食後にいくつかの論文を読み進めた。人工知能を取り巻く哲学的な論文と発達心理学者のアネット・カミロフ=スミスの論文が中心だった。書斎の机に積まれた論文の山もいよいよ無くなりかけている。夏季休暇はまだ一ヶ月ほど残っているため、論文の山が全て消えてからは、まだ一読できていない専門書を順番に読み進めていくことになるだろう。

論文を読み終えたところで、デンマークを代表する三人の作曲家について調べていた。カール・ニールセン、ニルス・ゲーゼ、エドヴァルド・ヘルステッドの三人だ。来週の今日、フローニンゲンを出発し、デンマークのコペンハーゲンに向かう。旅の移動に合わせて、その国の音楽を聴きたいという衝動がふつふつと湧き上がり、デンマークを代表する作曲家について調べていた。

彼らの作品の中から、代表的な曲をいくつか選び、それを旅の道中に聴きたいと思う。バスや列車での移動の最中にそれらの曲を聴くことが今から無性に楽しみだ。音楽は旅を豊かにしてくれ、旅は音楽を豊かにしてくれるという関係がきっとあるに違いない。

午後、突然に、昨年と今年に出版した二冊の書籍がとても愛おしく思えてきた。自分が起きている時にも寝ている時にも、それらの二冊が懸命に生き続けている様子が伝わってくる。そして、名前の知らない人たちと自分の代わりに対話をしてくれていることが、遠く異国の地からでもわかるのだ。その姿を見守っていると静かな感動が起こってくる。

© YOHEI KATO 2018

正直なところ、どちらの作品もどれだけ時の重みに耐えられるのか定かではない。仮に時の重みに耐えられなくなったとしても、私はそれらの書籍がこの世界で懸命に生きていたということを忘れたくはない。それらの書籍の生みの親は自分なのだから。

ひとたび世の中に送り出された書籍は、著者の手から離れる。だが、それをもってして、世に送り出された書籍との関係が途絶えるわけではなく、むしろそこから書籍を育てる必要が親としての著者に課せられた役割だろう。

世に送り出された書籍を育てる方法は、残念ながら具体的なものはない。自分の子供の成長を見守るように、書籍がこの世界の中で育っていく姿を見守ることしかできない。しかし、それはただ単に傍観するということでは決してない。親としての著者自身が、さらに成熟した姿に変容を遂げていくという歩みの中で書籍を見守っていくことが大事なのだ。

これから何冊の書籍を日本語で書くのかわからない。もしかするともう二度と書かないかもしれない。いずれにせよ、この世に生まれて来てくれた二冊の書籍は私にとってとても大切なものであり、自らの成熟の歩みの中で、今後の彼らの歩みを見守りたいと思う。親が子を育み、子が親を育むという関係がここにもある。2017/8/1(火)

【追記】

エドヴァルド・ムンクも、自身の作品を「子供たち」と呼んでいた。第二次世界大戦中、自分の子供としての作品の運命をムンクはとても心配していた。その気持ちが痛いほど伝わって来る。2017/8/15

No.25: Kaleidoscopic Symbols

Last night, I entered a subtle state of consciousness, in which kaleidoscopic symbols appear. An enormous amount of symbols flooded in my consciousness. These symbols have no relationships with one anther prima facie. However, I would like to investigate them because a particular rule or law might exist to generate those symbols that possess some relationships between them.

A subtle state of consciousness that can produce kaleidoscopic symbols is quite intriguing to observe and delve into. Monday, 8/7/2017